

イギリス思想が日本の大正期に与えた影響—そのスケッチ

国際日本文化研究センター 鈴木貞美

1、日本の大正期とイギリス思想

日露戦争後、日本は日英同盟を強化し、自由主義陣営の一角として、帝国主義的な領土拡大への道をひた走り、内には、政党政治の実現などデモクラシーの機運が渦巻く。ここには、大英帝国がひとつの理想的として働いている。本稿では、日露戦争後から関東大震災までの日本の思想文化に与えたイギリス思想の影響を概括する見取り図を試みる。これによって、これまで大正期の思想文化について私が行ってきた研究、とりわけ大正生命主義をめぐる、いくつかの点で補訂することになる。

帝国主義戦争の時代に、日本ではエネルギー工学思想が全面開花し、産業構造を国家主導で重化学工業化へとドラスティックに再編、軽工業にも大工場制が進んで、民衆の生活文化が大きな変容を被る。それによって江戸時代に育まれた信用を第一とする商業倫理が瓦解し、競争社会の到来が人びとの口にされた。すなわち民衆のあいだに生存競争原理が浸透し、それに対して、生存権をかけた闘争の季節が訪れ、また江戸時代の民衆文化が泰平楽の世として理想化される傾向も生じた。これらの背景には、重火器を用いた近代戦が兵士の肉体に多大な損害を与えること(日露戦争は23万人の戦病死傷者を出した)、重化学工業や大工場制が男女労働者の肉体に損傷をおよぼすこと、都市の膨張と汚染、機械文明の進展に対して生命の危機感の蔓延がある*。

*日露戦争下の1904年、官営八幡製鉄所の溶鉱炉に火が入り、戦後は全国の鉄道を買収して国有化するなど、国家主導で重化学工業化が進められてゆく。日露戦争では、安田資本が砲運丸という輸送船をフル回転するなど民間資本も潤った。第一次大戦期(1914~18)には輸出国に転じ、好景気となり、成金が肩で風を切って町をのし歩いた。日清戦争後、軽工業は絹糸や織物をアジアへ、世界へと輸出を拡大し、とりわけ中国マーケットを睨んで、生糸工場が増え続けたが、日露戦争後には急速に減ってゆく。弱小工場が淘汰され、大工場化が進むからだ。

片田舎から働きに出る20歳に満たない工女たちのなかには、糸繰りが上手で一シーズンで百円も稼ぐ「百円工女」も出た。家が一軒立つ金額といわれる。しかし、そんな工女はごく少ない。多くは、湯気の蒸せかえる工場のなかで、結核に冒され、体を痛めて田舎に帰るしかなかった。大工場になるにしたがい、人買い同然に集められ、賃金も労働条件も劣悪になってゆく。1911年

に年少者や女子労働者の保護を主な目的に、12時間労働などを盛り込んだ工場法が制定(施行は16年)されるが、まったくのザル法だった。

重化学工場では、過酷な条件で働く男性労働者の肉体や神経が傷んだ。農村が資本主義経済の浸透に対処するには、換金作物の栽培に力を入れ、また流安などの化学肥料によって生産高をあげるしかない。だが、どちらにも金が必要で、いよいよ資本主義経済に巻きこまれてゆく。ただでさえ重税に喘ぎ、土地を手放し、小作農になる農家が増えていた。それでも金銭を稼ぐためには男女とも肉体労働の出稼ぎに頼る状態が慢性化した。ついにやっていけなくなると、彼らは土地を離れ、都会の工場地帯に移り住んだ。都市の工場地帯はふくれあがり、貧民層がスラム街を形成し、東京、浅草ではセメント工場が灰を降らせ、大阪、西部では煤煙が小学校の机の上にも降りつんだ。職場への大型機械の導入は、人びとの神経を痛めた。

1922年に日本農民組合が結成された時、「全国民の七割が農民、そのうち七割が小作農」と述べているが、すでに農家数はずいぶん減っていた。その前年の1921年には、第一次世界大戦後の恐慌で農産物の価格が暴落し、3万5000戸が離農している。同じころの別の統計(戸主別)では、労働者の数が小作農を上まわっている。「国民の七割が農民……」は、かなり以前の、およその見当だろう。産業構造が急速かつドラスティックに再編されてゆくに伴い、さまざまな矛盾が噴き出した。とくに1910年代後期に民衆の怒りが爆発した。よく知られるのが1918年の米騒動だ。シベリア出兵を見こして米の買い占めが起こり、米価が高騰、それに怒った民衆が全国で暴動を起こした。以後、小作争議は1926年まで、ウナギのぼりに増えてゆく。

仏教改革にも日蓮宗に田中智学(1861)が出て、僧籍を離脱、壇家制度にかわって天皇制国家を結束の中心に置く在家仏教を唱えた(1894立正安国会、1914国柱会)。新興宗教もとりわけ出口王仁三郎(1871-1948)が率いる神道系の大本も世直しの色彩を強め、「皇道」の下での私有財産撤廃、貨幣廃止を訴え、知識人、軍人を巻きこむ大勢力となり、1921年に不敬罪等で弾圧(第1次)された。阿部次郎(1883-1959)の宗教志向をはらむ人格主義の思想も、社会改造を見すえていた¹。

都市問題(スラム化、スプロール化)に対しては、内務省地方局がロンドン郊外に建設されたレッチワース(Letchworth)——エベネザー・ハワード(Ebenezer Howard, 1850-1928年)の提唱で、1903年よりクェーカーのグループによって事業化された——を参考に、田園都市(garden city)構想と取り組んだが、伝統的な小規模都市の見直しの提言に終わった。ロンドン

¹ 鈴木貞美『戦後思想は日本を読みそこねてきた—近現代思想史再考』(平凡社新書、2009)を参照されたい。

と同様、問題の解決にはならなかったが、田園趣味をひろげ、新中産階層の居住地域として郊外の宅地開発に向かい、また大正生命主義が勃興する思想的基盤づくりに一役買った²。

大正生命主義は、宇宙の生命(エネルギー)を原理とし、それに仏教、神道、儒学などのいわゆる伝統思想が組み合わさり、多彩な傾向をもち、国際的にも突出した大潮流となった*。それを哲学で代表するのは、西田幾多郎(1870-1945)の諸作(『善の研究』1911、『自覚に於ける直観と反省』1918、「美の本質」1920など)と和辻哲郎(1889-1960)の『ニイチェ研究』(1913)である。大正生命主義に働いたほぼ同時代の欧米の哲学としては、アメリカのウィリアム・ジェームズ『心理学原理』(*Principles of Consciousness*, 1890)、フランスのベルクソン『創造的進化』(*L'évolution créatrice*, 1907)、ドイツの「生の哲学」(Lebensphilosophie)の流れがあるが、イギリス思想の流れ、とりわけラスキン(John Ruskin, 1819-1900)、ウィリアム・モリス(William Morris, 1834-96)、そしてバーナード・ショー(George Bernard Shaw, 1856-1950)の演劇の影響も軽視できない。

*エマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-82)を信奉した北村透谷の「内部生命論」(1893)やニーチェ(Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900)の思想をヒントに本能満足主義をとこなえた高山樗牛「美的生活を論ず」(1901)を先駆けとして、ヨーロッパ・アメリカの思潮と神道、仏教、儒学、道家思想などが結びついて、より多彩に展開した。日露戦争後、機械文明の進展に対する生命感の危機が蔓延し、自然志向や魂と現実社会の救済の願いが、その土壌となった。「真の生命」「万有の生命」「宇宙の生命」などがキイ・ワード。美術では岡倉天心の最初の英文の著書『東洋の理想—日本美術を中心として』(1903)、哲学では西田幾多郎『善の研究』(1911)、和辻哲郎『ニイチェ研究』(1913)、女性解放思想では平塚らいてう、社会運動では大杉栄、土田杏村、文芸では蒲原有明、徳富蘆花、岩野泡鳴、島村抱月、金子筑水、相馬御風、中沢臨川、有島武郎、武者小路実篤、高村光太郎、室生犀星、北原白秋、萩原朔太郎、斎藤茂吉、厨川白村、宮澤賢治らに示される。心霊研究で知られる福来友吉の『生命主義の信仰』(1923)、キリスト教社会主義の賀川豊彦の『生命宗教と生命芸術』(1927)もある。1920年代後半にマルクス主義が台頭すると鎮静するので、大正生命主義と呼ばれる。なお、これによって神道や仏教思想なども生命本位であるかのような解釈も生じた。日中戦争期には天皇を「宇宙大生命」の表れとする東京帝国大学憲法学者笈克彦に代表される神がかった天皇思想となって、右翼や軍部の支柱へと変じた。戦後にも変奏が見られ、地球環境問題の浮上とともに生命主義も漠然とひろがっている³。

² 鈴木貞美『生命観の探究—重層する危機のなかで』(作品社、2007)第五章9を参照されたい。

³ 鈴木貞美『生命観の探究』(前掲書)を参照されたい。

また、アイルランド独立運動と結びついたイェーツ (William Butler Yeats, 1865-1939) らの神秘的象徴主義も、それに刺戟されたインドの詩人、ラビンドラナス・タゴール (Rabindranath Tagore, 1861-1941) のノーベル文学賞受賞(1913)とあいまって、大正期の思潮に、反帝国主義、アジア主義の色彩をもたらしました。

生存権をかけた民衆の闘争は、政治的には政党政治の実現と普通選挙の実施に集約される大正デモクラシーを下支えした。1911年にドイツの国家有機体論に立ち、天皇主権論を唱える穂積八束 (1860-1912) - 上杉慎吉(1878-1929)ラインが、一木喜徳郎(1867-1944)の天皇機関説にイギリスの議会制を加味した美濃部達吉(1878-1948)の機関説を攻撃し、論争が行われたが、美濃部達吉側が官僚層、知識層の支持を集め、政党政治の実現に向かう契機となった(以降、1935年に国会で否定されるまで、機関説が公認されていた)。王室を戴くイギリスの議会制度が、その帝国主義の威容とともに日本の政治家や実業家のかなりの部分に、理想的モデルとして描かれていたことは否定しえない。

1910年の大逆事件によって社会主義が封じられるなかで、大杉栄(1885-1923)のアナルコ・サンディカリズムや賀川豊彦(1888-1960)のキリスト教社会主義が支持され、男女労働者のストライキ闘争や小作争議がさかんになる*。それらとならんで、ウィリアム・モリスらのギルド社会主義がかなりのひろがりを見せた。また国際連盟の創設(1919、アメリカは不参加、日本は常任理事国五カ国の一)など、第1次大戦後の平和ムードの高まりのなかで、バートランド・ラッセル(Bertrand Arthur William Russell, 1872-1970)が来日(1921)し、その著作もかなり注目された。

*労働争議は、1914年あたりから急増し、1919年から民間の造船所や鉱山、機器メーカーの大ストライキが相次いで起こった。1920年には官営八幡製鉄所の溶鉱炉の火が4日間、消えた。1917年のロシア革命でボルシェビキが権力を握り、一党独裁をとったことにいち早く警告を発し、アナルコ・サンディカリズムの道を歩む大杉栄の影響を受けた者たちが率いたものだった。神戸の造船所のストライキは、長くセツルメント活動を続け、消費者組合などを指導してきたキリスト教社会主義の賀川豊彦を指導者にしたものだった。賀川は、日本農民組合の結成にもかかわった。なお、日本では、1924年ころまで、工場で働く労働者の数は女性が男性を上まわっていた。1920年夏には、紡績工場でも組合をつくる権利をめぐるストライキが起こり、友愛会の女工たちが2週間、寄宿舎に立てこもった。夜業禁止など、労働条件をめぐる運動がさかんだった。その年春には、東京と横浜のタイピスト520人が8時間労働、最低賃金制を掲げて組合を結成した。こちらは新しい職業

婦人たちである。しかし、争議件数は、この時期をピークに急速に減少する。弾圧と対策が強化されるからだ。文部省は労働力再生産のための娯楽に積極的な意味を認めるようになってゆく。それでも組合の結成は1937年まで増え、次に争議が増加するのは昭和恐慌の1930年である⁴。

以下、2「エネルギー工学とスペンサー哲学とダーウィニズムの浸透」、3「大正生命主義に働いたイギリス思想」、そのうちとりわけ、4「モリスの思想とギルド社会主義、バートランド・ラッセルの来日」の3章に分け、それぞれ略述してゆきたい。

2、エネルギー工学とスペンサー哲学およびダーウィニズムの浸透

18世紀後半からの熱理論(theory of heat)が、熱を物質の一種の粒子と考える熱素(カロリック)説をとっていたのに対して、1850年にドイツの物理学者クラジウス(Rudolf Clausius, 1822-83)が熱はエネルギーであると規定し、熱と仕事の関係が定式化できることを示して、それを覆した。工学全般に携わってきたイギリスのランキン(William John Macquorn Rankine, 1820-72)は、1855年に、熱、力、仕事などを統一的に考えるエネルギー概念を提唱。1865年にクラジウスが熱現象には不可逆反応があること、その場合、対数を用いて示すエントロピー(entropy)の量が増大することを説き、熱力学(thermo- dynamics)が成立すると、エネルギーは一切の自然現象の根本原理と考えられ、エネルギー一元論(Energetics) *が盛んになった。

*生命をふくめ、すべての現象がエネルギーの転換で説明できるとする説。エネルギー還元主義とも。エルンスト・マッハ(Ernst Mach, 1838-1916)や、1909年、ノーベル化学賞を受けたオストワルト(Wilhelm Ostwald, 1853-1932)らが、アトム概念も仮説とし、19世紀後半から20世紀前期のヨーロッパ物理学界を席捲し、人文・社会科学にも浸透した。一時は「最後の原子論者」といわれたボルツマン(Ludwig Eduard Boltzmann, 1844-1906)が、エントロピーは分子のランダムな運動の平均値と説いて、統計力学を発展させたが、論争のさなかに自殺した。

アインシュタイン(Albert Einstein, 1879-1955)の特殊相対性理論(1905)や量子力学の展開、一個の粒子の位置、運動量、時間の関係が定まらないことを論証したハイゼンベルク(Werner Karl Heisenberg, 1901-76)の不確定性原理(1927)により、否定された。オストワルトも晩年、アトム存在を認めた。

イギリスにおける「エネルギー還元主義」の台頭は、いち早く西周が紹介(講義録『百学連

⁴ 鈴木貞美『戦後思想は日本を読みそこねてきた』(前掲書)を参照されたい。

環』、ただし、刊行は第二次大戦後1960)している。明治新政府は、ランキンの弟子、ヘンリー・ダイアー(Henry Dyer, 1848-1918)ほか8名を招き、1873年に工学寮を開校。これが、帝国大学工学部(1904)開設につながる(総合大学に工学部を設けたのは世界に先駆けていた)。そして、国家主導で官営八幡製鉄所、日本国有鉄道の経営など重化学工業化を進め、電気エネルギーへの転換期にもいち早くキャッチ・アップし、1910年代には村むらに電灯が灯る。

ベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832) や、とりわけミル (John Stuart Mill, 1806-76) の功利主義は、それを受け止めた自由民権運動の中で、すでに1880年代にスペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) の『社会静学』(*Social statics, or, The conditions essential to human happiness specified, and the first of them developed*, 1851, London, J. Chapman, 松島剛訳『平権論』1881)に、そして「最適者生存」(survival of the fittest)原理に置き換えられ、さらに1890年代にダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809-82) の生存競争原理が、それを促進した⁵。

20世紀への転換期には、帝国主義戦争の時期を迎え、個人の競争原理に立つスペンサー哲学は凋落し、生物進化論では、突然変異(mutation)説によって、ダーウィニズムも国際的に失墜した⁶。日本では、永井潜が『生命論』(1913)でそれを告げ、『人性論』(1916)では、いち早く総合説の立場をとっている⁷。だが、その認識は、あまりひろがらなかった。丘浅次郎(1868-1944)が『進化論講話』(1904)で進化論を体系的に紹介し、ダーウィンの帰納主義を「事実」にもとづく科学的態度と賞賛、ダーウィンにならって獲得形質遺伝をも認めて、ネオ・ダーウィニズムや突然変異説など特定の学説を絶対化することを退けながら、全体は諸行無常の世界観に立ち、生存競争原理は国家や人種間、信仰や倫理にも及ぶと説いた。これが、のちまで大きな影響を及ぼしたためと推測される。丘は『人類の過去、現在及び未来』(1914)では人類滅亡に向かう進化論を説き、修養書『進化と人生』(1906)、『煩悶と自由』(1921)なども一般にひろく受け入れられた。

他方、ピョートル・A・クロポトキン『相互扶助論—進化の一要因』(Pyotr Alekseevich Kropotkin, *Mutual Aid: A Factor in Evolution*, 1902、大杉栄が『平民新聞』に紹介。訳本1918)など、相互扶助思想もひろがる。ハクスリーが相互扶助の本能で生存闘争の本能をチェックすべきと説いたローマンズ講演(Evolution and Ethics[The Romans Lecture] 1893, *Evolution*

⁵ 鈴木貞美『生命観の探究』(前掲書)第一章を参照されたい。

⁶ ピーター・J・ボウラー『進化思想の歴史』(*Evolution, the History of Idea*)1984, 鈴木善次・他訳, 朝日選書(上下 1987)を参照されたい。

⁷ 鈴木貞美『生命観の探究』(前掲書)第九章三を参照されたい。

and Ethics, and other essays, Authorized ed., New York: D. Appleton and Company, 1897) は、中国ではこれと同題のハクスリーの論文とをあわせてスペンサー主義者の嚴復(Yán Fù, 1854-1921)が『天演論』(Tien-yian-lun, 1898)として翻訳刊行、「天と勝を争う」という序文のことばが知識層に衝撃を与えたが、日本での影響は不明。明治期の1900年前後にはじまる新式貸本屋、共益社のカタログには、この英書が確認される⁸。

3、大正生命主義に働いたイギリス思想

和辻哲郎は、「ショーに及ぼしたるニイチェの影響」(1910)で、イギリスで人気の高い劇作家、バーナード・ショーの戯曲を論じるにあたって、ショーがニーチェの影響について否定した『バーバラ少佐』(*Major Barbara*, 1905)序文にふれながら、しかし、ショーの『人と超人』(*Man and Superman*, 1903)にしても『バーバラ少佐』にしても、ニーチェの「すべての価値転換」を念頭において読むとき、生彩を放つものになると述べている。そして、「ショーとエデキントとの比較」(1912)では、バーナード・ショーとドイツのネオ・ロマンティシズムの劇作家、ヴェデキント(Frank Wedekind, 1864-1918)を並べて論じたドイツの評論を紹介しながら、和辻哲郎はためらいなくショーに軍配を上げている。バーナード・ショーの戯曲のうちに「宇宙根本の实在」としての”life force”という観念を見出し、〈ショーは宇宙根本の实在としてlife force というものを認めた。彼の「生活力」はちょうど「電子」とニイチェの「力」を調合したようなもので、昔の人の信じた神のような勢力を持っている〉⁹と述べている。「電子」は、当時では、宇宙の根本をなす微細物質とされていた。これは、和辻哲郎の脳裏に「宇宙生命の力」という観念が宿ったということを示している。そして、和辻は、ニーチェの哲学ととりくむうちに、オイケンやジンメル(Georg Simmel, 1858-1918)らの著作、そして、とりわけベルクソン『創造的進化』、すなわち20世紀への転換期の「生の哲学」の流れから世紀転換期のヨーロッパの生命観を汲みあげてゆく¹⁰。

ベルクソンは、物質を貫きながれる「生命」という「流動的な实在」(la réalité fluide)¹¹を考え、それにエネルギーの語を用い、また「宇宙の生命」(Cell [la vie] de l'univers)¹²

⁸ 鈴木貞美『生命観の探究』(前掲書)第二章五を参照されたい。

⁹ 鈴木貞美「和辻哲郎の哲学、芸術、生命観—『ニイチェ研究』をめぐって」『日本研究』第38集、2008を参照されたい。

¹⁰ 『和辻哲郎全集』第2巻、岩波書店、増補改訂1991、9頁。

¹¹ 『創造的進化』(松浪信三郎・高橋允昭訳、『ベルクソン全集4』白水社、1966、411頁、*L'évolution créatrice*, Librairies Félix Alcan et Guillaumin Réunies, 1907, p. 395。

¹² 同前、389頁、フランス語同前、p. 371。当時、物理学で主流だったエネルギー還元主義と、生物進化はダーウィンの唱えた自然選択ではなく、突然変異によるとする20世紀初頭におこっ

と呼び、そこに起こる「生命の跳躍」(エラン・ヴィタール、Élan vital)こそが、世界が創造的に進化する原動力である説いた。

だが、ショーよりも早く、日本の知識層には、ジョン・ラスキンの『近代画家論』(*Modern Painters*, 1843~60)や、とくによく知られた『建築の七灯』(*The Seven Lamps of Architecture*, 1849)から「真生命」(true life)という観念がひろがっていた¹³。『建築の七灯』は、ゴシック様式などヨーロッパ建築を論じたものだが、第四章「美の灯」には〈人は直接自然形を模倣することなしに美の創意に進むことは出来ない〉¹⁴とある。そこにつけられたアフォリズム19には〈美は凡すべて自然の形態の法則に基かれる〉¹⁵とあり、これを受けて、第五章「生命の灯」では、「美の本質的特性」として〈有機物に於ける生命のエネルギーの表現〉を基準としてあげ、それを真に発現することを「最高級の創造的生命」と称賛する。人間の「心の印象」を描いたり、刻みつけたりした作品のことだ。〈それらは、目に見えてそれらに使用されたところの心のエネルギーの量に比例して、尊くも卑しくもなるのである〉と述べられている¹⁶。彼は人間の「生命エネルギー」のうちにも習慣や偶然によって発現する偽者と、本物すなわち「真の生命」とがあると述べている¹⁷。

このラスキンのいう「心のエネルギー」「生命エネルギー」「真生命」などの考えは、20世紀への転換期には、ヨーロッパの物理学会を席卷したエネルギー一元論(energetic)に支えられ、「精神のエネルギー」という観念として、国際的にひろがった。たとえばベルクソンは、意識の進化を説く「意識と生命」や心霊や夢の研究の可能性を論じる講演などをまとめた『精神のエネルギー』(*L'énergie spirituelle*, 1919)という著書を刊行している。なお、ベルクソンは、明確に計量化を絶対視する科学主義に反対する立場を表明しているが、無意識の領域に精神エネルギーを想定する精神分析を提唱したフロイト(Sigmund Freud, 1856-1939)は、20世紀に入ると科学的な装いをとった。

なお、日露戦争後、象徴主義(symbolism)からアーリー・モダニズム(early modernism)へと展開する諸芸術には、森鷗外(1862-1922)が『審美新説』(1900)でフォルケルト『美学上の時

た突然変異説のふたつをあわせたもので、世界創造の根拠を法則性ではなく、偶然性におく哲学。なお、1920年代から30年代にかけて、生物進化論では、諸因の総合説が有力になってゆく。鈴木貞美『生命観の探究』(前掲書)第三章三節を参照されたい。

¹³ 鈴木貞美『生命観の探究』(前掲書)第五章四を参照されたい。

¹⁴ 『建築の七灯』、高橋松川訳、岩波文庫、1930、p.156

¹⁵ 同前、p.157

¹⁶ 同前、p.206

¹⁷ 同前、p.221

事問題』(Johannes Volkelt, *Asthetische Zeitfragen*, 1895)を紹介したあたりにはじまり、テオドル・リップス『美学』(Theodor Lipps, *Ästhetik*, 1903-06、阿部次郎『美学』1917が祖述)を中心にドイツ感情移入(empathy)美学が大きくかかわった。このリップス『美学』は、デイヴィッド・ヒューム(David Hume, 1711-76)が『人性論』三部作(*Treatise of Human Nature*, 1739-40)で説いた、人間の「知覚」を「印象」とその再現である「観念」からなるとする立場を大前提にしているとみてよい¹⁸。リップスの場合は、カント哲学が媒介になっているが、イギリス19世紀後半には、T.H.ハクスリー『ヒューム』(*Hume*, 1879)などが再浮上させたもので、こうした間接的なイギリス経験論受容も無視することはできない。

また生命主義の勃興にともない、性愛観の変容もうかがわれる。フロイト受容以前から、ハバロック・エリス(Ellis, Havelock, 1859-1939)の『性の心理学』(*Studies in the Psychology of Sex*, 7vol, 1897-1928)が森鷗外や谷崎潤一郎(1886-1965)らによって受容され、「変態性欲」という考えもしだいにひろがってゆく。

4、モリスの思想とギルド社会主義、バートランド・ラッセルの来日

そして、『建築の七灯』第五章「生命の灯」を高く掲げて、イギリス社会主義に活躍したのが、ラスキンの弟子ウィリアム・モリスであり、その思想は、日本では、とりわけ1920年前後する時期にひろがった。ウィリアム・モリスは、デザイナー、社会改革家で、ラスキンの「生命の発現としての労働および芸術」観を受け取り、装飾工房を経営してアート・クラフト運動、アール・ヌーボーの流行に先駆け、また、マルクス主義に同調しつつも、労働と生活の質の向上を訴え、職人の「手仕事の楽しさ」と民衆の日常生活を美しくする「小芸術」(lesser art)を根本理念に、中世ギルドをモデルにした労働者協働体を提案、独自の社会主義運動を展開した。機械から解放され、中央権力のなくなった生活共同体の感触をひとつの夢として書く『無可有郷便り』(1891)も知られた¹⁹。

その思想の受容は、『平民新聞』における堺利彦の紹介(1903)あたりにはじまり²⁰、岩村透『美術と社会』(趣味叢書第12編、趣味叢書発行所、1915)中の「ウィリアム・モリスと趣味的社会主義」²¹などを経て、加田哲二『ウィリアム・モリス—芸術的社会主義思想家として

¹⁸ チャールス・エドワード・ガウス「感情移入」(Charles Edward Gauss, *Empathy*)『世界思想大事典』(Dictionary of the Ideas)平凡社、1990、p.493を参照。

¹⁹ 小野二郎『ウィリアム・モリス—ラディカル・デザインの思想』中公新書(1973)を参照。1960年代後半のイギリスにおけるモリス研究の動向をも、よく伝えている。

²⁰ 山田眞實「堺利彦のモリス評価」『同志社大学英語英文学研究』39号(1985)を参照。

²¹ 総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻院生、九里文子さんの教示による。

の生涯と思想』(岩波書店、1924)、本間久雄『生活の芸術化』(1925)、大熊信行『社会思想家としてのラスキンとモリス』(新潮社、1927)など盛んになる。講演「民衆の芸術」(1879)などが民衆芸術論を活発にし、柳宗悦(1889-1961)の民芸運動にもヒントを与えた。

宮澤賢治(1896-1933)の「農民芸術論綱要」(1926)にも受容の跡が歴然と残る。賢治は、ラスキン・モリスの労働観を農耕労働に転用しようとしたと考えられる。岩手国民高等学校(1926年3月に花巻農学校で開校。デンマークのモデルを参照したといわれるが、土田杏村(1891-1934)が信州で展開した「自由大学」運動などと並ぶ動きと見られる)で、賢治が講義した際には、モリスの運動に加わった詩人、エドワード・カーペンター(Edward Carpenter, 1844-1929)が10時間労働して帰宅した後に細工物に創造的な喜びを見出す少年工について語っていることなどにふれている。本間久雄『生活の芸術化』(東京堂、1925)を参照したと思われる。なお、カーペンター『工業的自由の方へ』(*Toward Industrial freedom*, 1918)も加藤一夫訳『産業的自由：其の理論及實際』(洛陽堂, 1920)として刊行されていた。

最後に、1921年のバートランド・ラッセルの来日(7月12~30日)についてふれておく。これは、改造社の招きに応じたものだった。ラッセルは、イギリス経験論に立ち、ホワイトヘッド(Alfred North Whitehead, 1861-1947)とともに記号論理学による論理主義学派の出発点を築いたのち、第一次大戦に反戦の姿勢を貫いて1916年、ケンブリッジ大学の職を解かれ、論理学の成果を取り入れた評論でジャーナリズムに活躍、第一次大戦後の国際平和ムードの中で歓迎された。当時におけるラッセル受容については、他日を期さなければならないが、たとえば、7月18日夜には、神戸の阿弥陀寺で開催された演説会に出席し、1,000名ほどの労働者の前で短い講演を行った(通訳は賀川豊彦。賀川は当時、神戸の造船所の大争議を指導)。その『政治的理想』(*Political Ideals*, 1917)は、人間の衝動を所有的と創造的の二種に分けて説いている。本間久雄は、ウィリアム・モリス『有用の仕事対無用の仕事』(*Useful Work Versus Useless Toil*)などマルクス主義が説く資本制下の疎外労働からの回復の道を創造的労働の喜びに見出そうとする道を説く際に、それを引用している*。

*ギルド社会主義は、資本主義の浸透に対する同業組合の思想として、1910年代から20年代にかなりのひろがりを見せたが、内務省地方局、農商務省の被差別部落をふくむ農村改善運動や、二宮尊徳の教えに立つ大日本報徳社(1898創設)が盛んになることなどとの関係も考えあわせるべきだろう。江戸時代後期の農民指導者で、農村改良事業に取り組み、「祖先株」を持ちあう農民組合や農地の交換整理などを下総(千葉県)にひろめた大原幽学(1797-1858)が農民組合の国際的先駆者と喧伝されもした。財政学者で貴族院議員などを歴任した田尻稻次郎編修の『幽学全書』が1911

年に刊行され、17年には大幅に増補している。

京都帝国大学文学部英文科でアイルランド演劇を題材に卒業論文を書いた菊池寛(1888-1948)が花形作家になったのちも、作家らの組合づくりに熱心に活動し、劇作家協会の結成(1924)にこぎつけ、文芸家協会(1926)へ発展させるのも広い意味ではギルド社会主義に数えてよい。だが、たとえば大宅壮一「文壇ギルドの解体期—大正十五年における我が国ジャーナリズムの一断面」(1926)は、唯物史観の公式にのっとり、経済の発展に社会が遅れることを述べた上で、それを「日本の資本主義がようやく爛熟の域に達してきたとき、親方漱石の庇護のもとに、今日の文壇を担って立っているところの幾多の新人が排出して、文壇ギルドはここに完成の域に達した」²²と揶揄している。『新思潮』から出た芥川龍之介(1892-1927)、菊池寛、久米正雄(1891-1952)や、『白樺』の武者小路実篤(1885-1976)、志賀直哉(1883-1971)らを念頭に置いている。ギルドというからには親方が必要なので、彼が尊敬していた夏目漱石(1867-1916)を親方に見立てたまでのこと。このように語るのは、もちろん、それがすでにジャーナリズム隆勢や「円本」ブーム、そして「大衆文学」運動の勃興によって解体に瀕していることをいうためである。こうしてマルクス主義が青年層に台頭し、ギルド社会主義やアナルコ・サンディカリズム、またイギリス流の穏健なりベラリズムも揶揄の対象へと変わっていった。

1922年の日本共産党創立に加わった山川均(1880-1958)は「大衆の中へ」を説き、人気を集め、大杉らと争った(アナ・ボル論争)。1923年9月、関東大震災による混乱に乗じて官憲が大杉栄らを虐殺、致命的な打撃を受けたアナキストたちはボル派から暴力的にも排除され、ダダ派の芸術家とともに活動の場を地方に求めて散っていった。解党に走った山川に替わって、ハンガリーの哲学者、ルカーチの『歴史と階級意識』(*Geschichte und Klassenbewusstsein*, 1923)の説く、歴史の必然性を洞察した知識階級はプロレタリア革命に合流しうるとする理論を福本和夫(1894-1983)が採用し、強固な前衛党建設を打ち出すと、滅びゆく宿命を感じていた若い知識層がにわかに殺到した。だが、コミンテルン(1927年テーゼ)は、山川、福本をともに排除(山川は1926年、労農党を組織、福本は1923年3月15日に逮捕され、14年間入獄)、1926年にソ連から帰国した蔵原惟人が左翼統一戦線的な芸術運動を分裂させた。ソ連は前衛芸術運動を抑え、社会主義リアリズム路線を歩んでおり、蔵原は芸術を政治の道具とする立場から、合法活動の文化戦線に力を入れた。運動には加われないが信条は支持する「同伴者」を含めると、共産党の勢力は、1930年前後にジャーナリズムを席捲するほどの勢いをもった。

²² 『大宅壮一全集』第1巻、蒼洋社、1981、231頁。